

双塔

(新潟教会だより)

2013年1月

No. 296



カトリック新潟教会 月刊 双塔

毎月1回 最終日曜日発行

編集・発行/カトリック新潟教会

教会運営委員会広報部

〒951-8106

新潟市中央区東大畑通一番町 656

新年おめでとうございます

助任司祭 ナジ・エデルベルトゥス

寒い日々は続きますが、皆様が喜んで新年を迎える事を願っています。正月の一つの見ると、家の玄関にある新鮮な飾りです。それを見ると、住む人が誰であるとか関係なく喜びを分かち合う心があるという印象を伝えて来るような感じがします。宗教的な意味があるかもしれませんが、正月の飾りは知らない人に温かい新年の挨拶を静かに伝えるしるしでもあると思います。今年もこのような静かな挨拶を体験する事が出来た事に感謝致します。

静かな挨拶と言え、言葉を出して挨拶する、しかも聖堂の玄関で信者一人ひとりに挨拶する経験を思い出します。ある小教区の助任司祭として務めさせていただいていた時のことで、ミサが終わると司祭が香部屋へ戻って、着替えてから聖堂正面から出る信者に挨拶の言葉を掛けるのですが、初めての経験は難しかった。挨拶されたがると誤解される心配から信者に挨拶がしたくないのではなく、寒いからしたくない時がありました。しかしそれは一つの感謝の表し方だと注意されたので、寒くても2年間それをする事にしました。教会へ足を運んで司祭や他の信者と共にミサを捧げる事は難しい事で、それに共同体の祈りは真実を共に喜び祝う事であり愛のわざである（一コリント 13・6）というふうに考えてから、冬の間でも信者一人ひとりに声を掛ける事が出来るようになったんですね。挨拶する角に福があると思って心を込めて挨拶をする事にしています。

昨年聖堂で、神のみわざを共に記念したり、神の恵みに共に感謝したり、降誕の喜びを共にする事ができた事に感謝いたします。夜だけ楽しむ事ができますが、聖堂の正面にある木に綺麗なあかりがあって、イエス様の降誕を迎える喜びを込めてつけられています。今年も真の平和へ導くため来られた世の光であるイエス様（ルカ 1・79）の後に従って共に歩むように宜しくお願いいたします。

新年おめでとうございます。

双塔かわら版

ニュース~~~~~

○…王であるキリストの祭日・司教公式訪問（11/25）

新潟教会の祝日とも言える、王であるキリストの祭日には、ほぼ毎年、菊地司教が公式訪問、9時半のミサを司式しています。2012年は11月25日がこの祭日にあたり、9時半ミサは菊地司教、江部神父の共同司式で、日・英二ヶ国語ミサとしてささげられました。

この前の週、菊地司教はカリタスアジアの会議でフィリピンのマニラへ飛び、帰国してそのまま11月23日（金）には日本カトリック神学院東京キャンパスの「ザビエル祭」、翌24日（土）には横浜教区カテドラルで「日本宣教150年」のお祝いに出席、夕方の新幹線で新潟に戻るという過密スケジュール。そのようなこともあり、江部神父はミサ後の祝賀会の席上、「昨夜は、司教さんの部屋に電気がついたのを確かめて、ああこれで明日はミサを司式してもらえると安心して床につきました」と明かされました。

この日の祝賀会は昼食会の形式で行われ、和やかに歓談しながら互いの親睦を深める機会となりました。

【菊地司教 説教要旨】

・10月11日から（新潟教区では10月7日の新潟教区100周年記念ミサから）「信仰年」が始まった。司教団は10月11日付のメッセージで、この機会に信仰の根本を見つめなおすようにと呼びかけている。それには、教皇様がすすめているように『カトリック教会のカテキズム』を読み直すとか、『信仰の門』を読み直すとか、聖書をしっかりと読んでみる—なぜなら、聖書は生きている神のことばであるから—といった方法が考えられるし、またそのように呼びかけられている。

- ・つねに自分自身に問いかけていただきたいことは以下の3つ。すなわち、
 - ① いったい何を信じているのか。→これについては学ぶことができる。
 - ② どうして信じているのか。→これが解っていないと、単に知識が増えていくだけ。
 - ①と②は、順序が逆かもしれないが、いまは宗教の形が出来上がってしまっているのです、こういう形になる。何が私をしてキリスト者になろうとせしめたのか、ということ。
 - ③ 信じているならば、どのように生きていくのだろうか。
 - ・教会の本質的な務めは、みことばをのべ伝えること、典礼を祝うこと、そして、愛の奉仕。これら3つはそれぞれ同じ価値をもっており、3つが十分はたらいているとき教会は充足する（教皇ベネディクト十六世使徒的回勅『神は愛』参照）
 - ・宣教は、ことばと行いを通して、信じていることをあかししていくこと。
 - ・典礼を美しく祝うこと、典礼について学ぶこと。
 - ・愛の奉仕のわざの中で、どう生きるか実践していく。
 - ・東日本大震災からこの1年半あまり、日本の教会は仙台教区とともに被災地を側面から支援してきた。こうしたことの積み重ねは、教会全体の愛のわざの一部分をなしている。その中で、教会が今試されている愛の実践のどの部分を担っていけるのか、一人ひとりに考えていただきたい。
 - ・自分の信仰を深めることは、単に自分のためというよりも、教会全体の信仰を深めること
-

につながっていくものである。

○…クリスマスの飾りつけ (12/2・9)

2012年のクリスマスはの準備は、12月2日(日)の聖堂・センターの大掃除、12月9日(日)の聖堂内の馬小屋の設置や聖堂内外のクリスマスツリー等の飾りつけの二度に分けて行われました。

このうち、聖堂内では例年のようにピエタ像の前に馬小屋が設置され、祭壇に向かって左側のクリスマスツリーの飾りつけとともに多数の信徒が参加して飾りつけを行いました。



○…第20回 典礼学習会 (11/11)

12月9日(日)9時半ミサ後、20回目となる典礼学習会が江部神父の指導で行われました。この日はクリスマスの馬小屋づくりや総務部会などが予定されていたことから、ミサ終了後ただちに始め、聖歌練習は省略となりました。

今回はミサの諸要素のうち「聖体拝領」から「閉祭」の部分を取り上げられ、ミサ式次第に基づく学びも一応の区切りとなりました。

次回(1月13日を予定)は、これまでの内容についての質問を受け付けるほか、祭具類の取り扱い方について取り上げる予定ということです。

【交わりの儀—聖体拝領 (『ミサ典礼書の総則』56へ〜ル)】

① 拝領前の信仰告白の祈り

「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い」「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう」

→日本における適応、ヨハネ6・60-69 ペトロの信仰告白のことばから採られている。

(参考)ローマ規範版では、しもべの病気を癒していただいた百人隊長のことばから採られている。

② 聖体拝領

司祭は「キリストのからだ」といって信者に聖体を示し、拝領者は「アーメン」と答えて聖体を受ける。この応答は大切。

「キリストのからだを拝領すると同時に、自分が属する教会というキリストのからだをもいただく。」(アウグスチヌス)

*ミサの基本理念…たがいに奉仕し合うもの。

③ 拝領の歌 拝領が続く間、行列に伴って全員で歌ってほしい(聖歌隊だけに任せずに)。

・詩篇34・9「味わい、見よ、主の恵み深さを」(新共同訳)

「深く味わって悟りを得よ。神は恵みに満ちておられる」(典礼訳)

④ すすぎと沈黙 奉仕者はカリスをすすぎ、パテナ等を片づける。

⑤ 拝領祈願 主の食卓にあずかった感謝とその恵みを日々の生活に生かす力を願う。

【閉祭】

① 閉祭のあいさつと派遣の祝福

② 散会…祭儀を終えて、あかしをするために出ていく。

ミサは派遣されるために（散会するために）集まる

- ・ 社会に出る
- ・ 市民としての責任を果たす
- ・ 人々に仕える中で神に栄光を期す

③ 閉祭の歌（退堂の歌） 「総則」には規定はない。歌わないことがあってもよい。

【その他】

① ミサは生きている。形さえ守っていれば、ということになしに、沈黙や間（ま）、対話句・応唱、ミサの準備をする。

② ミサの後しばらく沈黙の雰囲気欲しい。ミサ前少なくとも 15 分間くらい沈黙、またそれ以外のときでも聖堂の中に祈りの雰囲気を保つようにしてほしい。

③ 朗読者について。

- ・ 朗読に先立ち、先にタイトルを読む。
- ・ 朗読は「ゆっくりと・大きな声で・はっきりと」
- ・ 読み終わったら朗読聖書に一礼（これが読み終わりの合図）。侍者が「神に感謝」と唱える。

④ 先唱のタイミング（間）（現在は週日のミサで）

・ 第一朗読が終わって答唱詩編を唱え始める前に適当な間をとる（沈黙）。アレルヤ唱（または詠唱）の前も同様。 (以上)

○…待降節黙想会（12/15～16）

12月15日（土）、16日（日）の両日、ラウル・バラデス師（青山教会主任）を講師に迎え、待降節黙想会が行われました。

一日目の講話で、ラウル師はまず、「信仰年をテーマに、青山でも話をしたが、ここでも同じテーマで、思いついた話をさせていただきます」と前置きし、教皇ベネディクト十六世が書簡『信仰の門』で説き起こしているところから従って、サマリアの女の姿と現代人の共通点を指摘、「信仰の危機」について語られました。また、講話後のゆるしの秘跡に先立って、この秘跡の受け方のポイントと思われる事柄をいくつか指摘されました。

二日目は、前日に続いて、回心がとりあげられましたが、その中で、これを別の角度から取り上げて考察の材料を提供されました。

【ラウル師講話 概要】

<サマリアの女と現代人の類似点>

- ・ サマリアの女は現代人のイメージ。現代人は渴いている。自分を満たす者がみつからない。どこに行けば自分を見たすうものがあるか、解決の方法がわからない。
 - ・ 以前は、文化と宗教を別にして、どこかで人ほとにかく神の存在を信じていた。だがいまは時代が変わった。いわゆるキリスト教国においても、秘跡や儀式は教会でするけれども、日常の生活では教会と縁がない。これが「信仰の危機」。
 - ・ 原因はいくつかあるが、そのひとつには 17～19 世紀のヨーロッパの思想があり、人間の視
-

点からすべてを見るようになった。→結果として、多くの人が教会から離れてしまう。

- ・他方、信仰の危機は悪い面だけでなく大きなチャンスでもある。

<回心>

- ・回心…一人ひとりが考え方、行動の仕方を見直すこと。

私たちはみことばによって作りかえられ、新しい人間になっていく。生き方の方向を変える、そこから出発しなければ本当の意味での信仰年にならない。

- ・この1年間をきっかけとして自分を少しでも帰ることができれば十分と思う。

・教会の歴史をみると、社会や教会を変えたのはたいてい1人か2人から始まっている。一人の回心によって世界が変わる。まず個人レベルから始めなければならない。

・聖人というものは、その人がそこにいるだけで周りの人を変えることができる。助任司祭をしていたころ、自分では十分やっているつもりでも、主任司祭の姿勢を見ていると、何も言わなくても自分に問いかけてくるものがあつた。本物であるならば世界を変えることができる。

・教会は歴史の中でいろいろな過ちも犯してきたが、それにもかかわらず聖なるものである。なぜなら、イエス様がその中におられるから。

- ・周りが変われば…、と言っていてはきりが無い。一人ひとりが生活を変えることが必要。

<信仰>

- ・長く教会とかかわっていても考え方が変わらなければ…？

- ・私が持っている信仰は神が望んでいる信仰なのか？

- ・信仰によって新しい人間に変えられていく。…考え方、感じ方、話し方、行動の仕方。

・こういうテーマについてこのように考えているけれども、それは教会の考え方とずれていないか確かめるために、カテキズムがある。

・結婚のために洗礼を受けたので何もわかりません、という人がいる。だがそれも素晴らしい信仰体験といえる。

- ・信仰年にあたり、互いの信仰体験を分かち合うことができれば素晴らしい。



信仰年 2012
2013

